

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：12103

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26893030

研究課題名(和文)聴覚障害者のアクセシビリティ向上を目指した医療・福祉サービスに関する包括的検証

研究課題名(英文)Comprehensive study of health care and welfare service aimed at accessibility improvement of deaf people

研究代表者

小林 洋子 (KOBAYASHI, Yoko)

筑波技術大学・障害者高等教育研究支援センター・助教

研究者番号：20736657

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：聴覚障害者の健康状態と様々な要因の関係を統計学的に細かく分析した。その結果、聴覚障害になった時期や精神的健康状態の違いは、社会経済的状态や文化的背景、社会参加状況、他の健康状態、サービス利用へのアクセス状況が、健康状態と有意に関連することが明らかになった。現在国の政策として取組まれている障害者施策を展開していく上で、本研究で示す統計データとその解析結果は聴覚障害者のアクセシビリティ向上の重要性について議論する際の重要な資料となりうると考える。

研究成果の概要(英文)：I analyzed the health condition of deaf people and the relations of various factors statistically. As a result, it became clear that a socioeconomic status and a cultural background, the society participation situation, other health condition, the access situation to the service use were related to when becoming deaf and mental health difference. As developing a measures for persons with disabilities as an endeavor of state policy, statistical data and the analysis result to show in this study is considered to be with an important document when I argue about importance of the accessibility improvement of the deaf people.

研究分野：公衆衛生学

キーワード：社会医学 医療・福祉

1. 研究開始当初の背景

従来、障害者は医学モデルを背景にマイナス的な視点でのみ捉えられてきたが、近年は社会モデルも融合する形でプラス的な視点も含んだ包括的検証の重要性が唱えられるようになってきている。聴覚障害者に関しては、アクセシビリティおよび生活の質の向上実現に向けた望ましい発展のあり方について研究と調査が求められている。聴覚障害者の精神的健康状態を含む健康状態に影響する要因についての研究や調査は手付かずの状態にあるが、それらの要因は聴覚障害者のアクセシビリティ及び生活の質に影響を及ぼしていると考えられる。

そこで、本研究では、聴覚障害関連のネットワークを活用しながら、聴覚障害者の実態を把握、具体的には、聴覚障害特性と健康との関連、さらには背景要因として社会経済・文化的背景・社会参加状況・サービス利用・サービスへのアクセス状況と健康との関連を検討し、統計学的に解析する。これにより、聴覚障害者の健康状態が、聴覚障害者の特性に左右されていること、また経済状態や生活習慣、支援・サービスや福祉機器等の利用状況にも左右されていることを明らかにできると考える。

2. 研究の目的

(研究1)

言語習得前後の違いと健康との関連を明らかにする。また、言語習得前後の違いと社会経済的、文化的特徴、医療サービスや保健福祉サービスへのアクセス状況、社会参加状況、健康関連行動、障害特性との関連についても検討する。そして性別における関連の違いについても明らかにする。

(研究2)

精神的健康状態の違いと社会経済的状態、健康関連状態との関連を明らかにする。また、性別における関連の違いについても明らかにする。

3. 研究の方法

対象の選定:

全国における20歳以上の聴覚障害者940人を対象に、2014年3月末～5月中旬にかけて郵送による無記名式質問紙調査を実施した。調査票は聴覚障害者団体・全日本ろうあ連盟を通して配布と回収を行った。

調査項目:

基本属性(性別、年齢、教育歴)、障害特性(障害者手帳の有無、手帳等級、聴力、アイデンティティ、障害受容、コミュニケーション)、家族形態(世帯状況、結婚の有無、家族中における聴覚障害の有無)、経済状態(就労状態、職場における困難、

転職)、医療サービスへのアクセス(通院状況)、健康状態(主観的健康感、精神的健康感)、主観的幸福感、悩み・ストレス、健康関連行動(喫煙、飲酒)、保健・福祉サービス(社会保障、保健等)へのアクセス、社会参加状況

分析方法:

(研究1)

聴覚障害発生年齢3歳未満を「言語習得前」、3歳以降を「言語習得後」の2群に設定した。

この2群を独立変数、各項目を従属変数とし、全体・男女別にStudentの t 検定、 χ^2 検定、Fisherの直接確立法を用いて分析した。

単変量解析において有意水準 p 値5%未満で「言語習得前」群と有意な関連のみられた項目を従属変数、年齢、性別、聴力(性別に見た分析では年齢と聴力のみ)を調整変数として多重ロジスティック回帰分析した。モデルの適合度判定にはHosmer-Lemeshow検定を用いた。

(研究2)

精神的健康状態についてはメンタルヘルス尺度(K6)を利用した。過去30日間の感情に関する6つの項目「神経過敏に感じましたか(緊張感)」「絶望的だと感じましたか(絶望感)」「そわそわ、落ち着かなく感じましたか(落ち着きのなさ)」「気分が沈み込んで、何か起こっても気が晴れないように感じましたか(憂うつ)」「何をしても骨折りだと感じましたか(倦怠感)」「自分は価値のない人間だと感じましたか(無価値)」から、5段階のリッカートスケール(いつも=1点、たいてい=2点、ときどき=3点、少しだけ=4点、まったくない=5点)で該当するものを1つ選択とした。次に、1～5点を4～0点に修正した(いつも=4点、たいてい=3点、ときどき=2点、少しだけ=1点、まったくない=0点)。そして、5点未満を「精神的健康感が良い(K6スコア低群)」、5点以上を「健康的健康感が悪い(K6スコア高群)」の2つに群別した。

「精神的健康状態が良い」、「精神的健康状態が悪い」の2群を独立変数、各項目を従属変数とし、全体・男女別にStudentの t 検定、 χ^2 検定、Fisherの直接確立法を用いて分析した。

単変量解析において有意水準 p 値5%未満で「精神的健康状態が悪い」群と有意な関連のみられた項目を従属変数、年齢、性別、聴力(性別に見た分析では年齢と聴力のみ)を調整変数として多重ロジスティック回帰分析した。モデルの適合度判定にはHosmer-Lemeshow検定を用いた。

統計学的検定:統計パッケージIBM SPSS Statistics version 21を使用し、有意水準は

p 値 5%未満とした。

4. 研究成果

(研究 1)

全体において、言語習得前群は言語習得後群に比して、より健康状態および主観的幸福感がよく、社会保障(福祉給付・失業保険・障害年金・障害者手当等)、保健(福祉センター・障害者団体・福祉関係機関等)を含む保健福祉サービスへのアクセスがよかった。

全体において、言語習得前群は言語習得後群に比して、より最終学歴が高く、また幼稚部時代に特別支援教育を受けており、文化的アイデンティティを持つ(ろうとしての障害を受容している)傾向であった。悩みやストレスの原因としては家族以外との人間関係ではなかった。

性別に分けてみた結果、男女共通で有意な差が見られたのは幼稚部時代に特別支援教育を受けていた、主観的幸福感がよいことであった。男性においてのみ有意な差が見られたのは主観的健康感、保健福祉サービスへのアクセスおよび最終学歴、アイデンティティ、転職経験、悩みやストレスの原因であった。女性においてのみ有意な差が見られたのは、精神的健康感、悩みやストレスの相談相手であった。

障害者手帳の有無、障害受容、世帯状況、仕事の有無、職場における困難、通院の有無、喫煙、飲酒、社会参加(生き甲斐楽しみ)についての違いは認めなかった。

言語習得後に聴覚障害を生じた場合、社会生活になかなか適応出来ず、心理的に孤立したり精神面に影響を及ぼしやすく、結果的に健康状態が悪くなることが示唆された。言語習得前群は早い時期から自立活動など様々な困難を主体的に克服するための教育などを受けてきたことで、行動面および精神面に影響をあまり及ぼすことなくうまく社会生活に適応しつつ、結果的にサービスへアクセスしやすくなってきているのではないかということが考えられる。本研究は横断研究であり、因果関係には言及することは難しい。しかし、これまでに明らかにされてこなかった言語習得前後別における違いを全国レベルでみている、またある程度のサンプルサイズが確保されていることは今後聴覚障害者のよりよい社会参加実現に向けた政策を検討するにおいて有用な知見である。

(研究 2)

全体において、精神的健康状態は社会経済的状态や他の健康状態と関連しており、それは男性女性においても同様な傾向にあった。

男性においては、主観的健康感、幸福

感、ストレスが精神的健康状態と関連していた。女性においては、就労状態、幸福感、ストレスは精神的健康状態と関連していた。

今後、社会経済的状态の決定的要因とそれらのメンタルヘルスへの影響について検討する必要があることが考えられた。

本研究のように、聴覚障害者の健康と様々な要因の関係を統計学的に細かく分析する点に着目した研究自体は極めて少ない。本研究で示す統計データとその解析結果は聴覚障害者のアクセシビリティ向上の重要性について議論する際の重要な資料となりうると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

Kobayashi Y 他、Triple difficulties of Japanese women with hearing loss: marriage, smoking, and mental health issues (邦題: 聴覚障害のある女性と婚姻、喫煙、精神的健康) PLOS ONE、査読有、Vol. 10, No. 2, 2015、e011664

小林洋子、聴覚障害のある人とアクセシビリティ-医療・福祉サービスへのアクセス実態-、メディカルサイエンスダイジェスト、Vol. 42, No. 4, 2016、pp. 13-14

小林洋子 他、聴覚障害のある女性が置かれている境遇を考える-ジェンダー視点からみた聴覚障害と統計、医学のあゆみ、Vol. 256, No. 7, 2016、pp. 843-845

[学会発表](計 3 件)

Kobayashi Y、Osugi Y 他、Gender difference in socioeconomic and health status among Japanese deaf adults: Results from the national level survey in Japan (邦題: 聴覚障害者の社会経済的状态と健康状態におけるジェンダーの違い: 全国レベルの調査結果から)、2015 American Public Health Association Annual Meeting and Expo、2015-11-6、米国シカゴ州

Kobayashi Y 他、Activity limitation, social and health conditions among Japanese elderly people with hearing loss (邦題: 高齢の聴覚障害者における社会参加制限と社会的状態・健康状態に関する研究)、The 3rd International Conference on Global Aging, Tsukuba Global Science Week 2015、2015-9-30、茨城県つくば市

小林洋子、大杉豊 他、聴覚障害者の障害発生年齢による健康状態及びサービスへのアクセスの違い~全国調査

から～、第 73 回日本公衆衛生学会、
2014-11-6、栃木県宇都宮市

〔図書〕(計 1 件)

小林洋子 他、明石書店、聴覚障害者、
ろう・難聴者と関わる医療専門家のため
の手引き (Working with Deaf People:
A Handbook for Healthcare
Professionals) 2017

6 . 研究組織

(1)研究代表者

小林 洋子(KOBAYASHI, Yoko)
筑波技術大学障害者高等教育研究支援
センター・助教
研究者番号：20736657

(2)研究協力者

大杉 豊 (OSUGI, Yutaka)